

このページは白紙です。

【一】 次の文章は、今から八十年あまり前の時代の物語です。当時の学校制度は現在とは大きく異なりますが、本文中の「次郎」は君たちとほぼ同年代の少年です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

次郎が中学校入学式で講堂に入った時、まず第一に眼についたのは、正面右側に掲げてある、すばらしく大きな額だった。それには「進徳修業」の四字が、まるでほうきの先でも書いたように乱暴に並んでいた。次郎はただその大きさと乱暴さに驚いただけで、ちっともいい字だとは思わなかった。

（どうしてこんな乱暴な字を額になんかしてあるんだろう）

彼はそう思つて、すぐ眼を左のほうに転じた。

左正面にも同じ大きさの額がかかっていた。しかし、それには平仮名交じりの文章が四箇条ほど箇条書きにしてあったので、さほど大きくは見えなかった。字も丁寧だった。書体は少しくずしてあったが、次郎にも読めないほどではなかった。彼は他の新入生たちが何かそこそそささやき合っている暇に、念入りにそれを読んでみた。文句は次のとおりであった。

一、武士道においておくれ取り申すまじきこと

一、主君の御用にたつべきこと

一、親に孝行つかまつるべきこと

一、大慈悲をおこし人のためになるべきこと

次郎は武士道という言葉の意味を、はつきりとは知っていなかった。しかし、第一条はよくわかるような気がした。第二条と第三条

とは、これまで修身（＝道徳）の時間で十分教わってきたことだし、別に珍しいとも思わなかった。親孝行のことを、自分の境遇にあてはめて考えてみようという気にも、まるでならなかった。ただ、この二箇条をなぜ初めのほうに書いてないのだろうと、それがちよつと思議に思えた。

第四条の「慈悲」という言葉が、妙に彼の心をとらえた。彼はその言葉の意味を「武士道」という言葉の意味以上に知っていたわけではなかったが、その字を見た瞬間、すぐ正木のお祖母さん（亡くなった母の美家の祖母）のことを思い起こしたのだった。

「慈悲深い方だ。」「仏様のような方だ。」

これが正木のお祖母さんのうわさをする時に、村人たちがいつも使う言葉だったのである。

次郎は何度も大慈悲の一条を読み返した。そして、正木のお祖母さんが自分や家庭の者や村人たちに対して言ったりしたりしていたことを、いろいろと回想してみた。そのうちに彼は、うれしいとも寂しいともつかぬ、妙な感じに襲われてきた。そして、それからそれへと連想が続いて、正木のお祖母さんとお墓参りをしたことから、ついには亡くなった母の顔までが思い出されてくるのだった。

左側の窓の上の壁には一間（＝約一・ハメートル）おきぐらいに大き

な油絵がかかっていた。それはすべて郷土出身の維新（明治維新）当時の偉人の肖像画だった。次郎は見ることもなくそれを見ているうちに、その下に新入生の父兄たちが顔をずらりと並べているのに気付いた。次郎はすばやくその中に父の顔を見付けた。父も彼を捜していたらしく、視線がすぐぶつかった。次郎は少し顔を赤らめて眼をそらし、今度は右のほうを見た。

右側の壁には軍人の写真の額が一尺（約三〇センチメートル）おきぐらいにかかっていた。次郎は多分学校出身の戦死者の額だろうと思いいちいちその下に書いてある名前を見たいと思ったが、自分の位置がずっと左側になっていたのによく見えなかった。

やがて型どおりの式が進んで、校長の訓辞が始まった。

校長は五分刈りで、顎骨の四角な、眼玉の大きい、見るからに魁偉な（顔形のいかつい）感じのする、五十四、五歳の人だった。いくぶん中風気味らしく、おりおり顎や手が変に震えていたが、その大きな眼玉からは人を射るような鋭い光が流れており、しかも、その中にどこか人の心をひきつけるようなやさしさが漂っていた。

次郎は校長が壇に立った瞬間から、何かしら気強い感じがした。

「私が本校の校長、大垣洋輔じゃ。」

校長はまずそう言つて口を切った。訓辞はそう長くなかった。

「君らは日本の少年の中の選士である。選士に何よりも大切なのは、へりくだる心と慈悲心でなければならぬ。そういう心をもった人だけが、ほんとうに正しい努力をする。正しい努力をする人だけが、

ほんとうに伸びる。伸びる人であつてこそ真の選士といえるのだ。傲慢な（おごりたかぶった）人や無慈悲な人には正しい努力がない、そういう人は一見強そうに見えて弱いものだ。それは生命の伸びる力が止まっているからだ。君らは決してそんな人間になつてはならない。学問においても心の修養においても、伸びて伸びやまない人間になつてもらいたい。それでこそ日本が伸びるのだ。へりくだる心、慈悲心、そして伸びる日本。——諸君を迎える私の第一の言葉はこれである。」

大体そういった意味のことであつた。それでも、二、三の実例をあげてわかりやすく話したので、十四、五分間はかかった。その後校長は父兄のほうに向かつて自分の教育方針を話し、それで式は終わった。

「りっぱな校長先生だな。」

式がすんで校門を出ると、俊亮（次郎の父兄）は次郎を顧みて何度もそう言つた。次郎はうれしかった。

翌日はさつそく始業式だった。

次郎が驚いたことには、組主任（学級担任）の先生に引率されて講堂に入ると、新入生の座るすぐ右側の席に、もう五年生（最上級生）らしい生徒が高い塀のように並んでおり、その多くが気味のわるい眼つきをして、じろりじろりと新入生たちを睨め回していることだった。

次郎は席につくと、首をちぢめ、そつと隣の新生にたずねた。

「僕たちの右のほうに並んでいるの、五年生？」

「そうさ、五年生だよ。五年生の右が四年生で、三年生と二年生とが僕たちの後ろに並ぶんだよ。この学校では一学期の始業式には新入生との対面式があるんだから、いつもそうだってさ。」

隣の新生はいかにも物識り顔に答えた。次郎はなぜかいやな気がして、それっきりうつむいてばかりいた。

やがて先生たちの顔がそろい、最後に校長が入つて来て、すぐに壇上に立った。そして、一同の敬礼をうけると、「ただ今より、二年以上の生徒と、新入学生との対面式を行う。」と言つた。

対面式は別に面倒なものではなかった。一年が右に、四年五年が左に、それぞれ向きを変え、二年三年はそのままで、体操の先生の号令で同時に敬礼をし合うだけだった。しかし、次郎の気持ちはいよいよ不愉快にしたのは、すぐ眼の前の五年生が、号令では頭を下げないで、一年生が顔を上げたころになつて、やつとばらばらに礼を返したことだった。しかも、その顔つきは礼を返しているというよりも、あざ笑っているといったほうが適當であつた。

対面式がすむと校長の始業式の訓話が始まった。まず新入生のほうを向いて上級生に兄事する（先輩として敬意をもって接する）心得を説いたが、それはほんの二、三分で、校長の顔はいつの間にか五年生のほうを向いていた。顔が五年のほうに向くと同時に言葉の調子も高くなり、その眼つきも光ってきた。そして、「どんなわずかな力でも、それを不正なことに使つてはならない。不正なことという

のは慈悲心のない行いじゃ。武士道におくれをとらないというのも、慈悲心が内にみなぎつていて初めてできることで、それがなくては武士道も何もあつたものではない。よろしいか。本校の生徒はみんな涙のある人間になつてくれ。涙のある人間だけが、すべてを支配することができんじや。」と、演壇の端まで乗り出して来て言つた時には、もうどう見ても五年生にだけ話していると思えなかつた。

その時、五年生の中にはごく少数ではあつたが、お互いに顔を見合つて、変ににやにやしたり、傲然と（いばつて人を見下すように）伸び上がつて校長の顔をにらみ返すようなふうをしたりする者があつた。次郎は、横からよく見えなかつたが、できるだけ五年生の表情に注意していた。そして、何かしら不安なものを胸の底に感じた。

式がすんだ後、教室で組主任からこまごまと注意があつた。それでその日の予定は終わりであつた。ところが、組主任の先生は、自分の注意が終わつた後、気の毒そうな顔をして言つた。

「五年生たちが、校風をよくするために、君らに雨天体操場に集まつてもらつて、何か話したいと言っている。これは毎年の例だ。間もなくだれかが迎えに来るだろうから、しばらくここで待つていてもらいたい。自分は今から職員会議があるから、そのほうに行く。」そう言つて先生はすぐ出て行つた。残された新入生たちは、お互いに顔を見合せて黙りこんだ。間もなく五年生らしい生徒が二人

でのっそり教室に入ってきたが、その一人は教壇に立つて、じろじろとみんなを見回した。人相がよくないうえに、制服のボタンが五つのうち三つしかついていない。しかも一番上の一と一番下のとははずれていて、あかじみたシャツが上下からのぞいているのが、いかにもきたならしく見える。次郎は軽蔑したい気持ちになってきた。と、だしぬけにその生徒が怒鳴った。

「上級生に対して尊敬の念を持たないやつは、顔を見るとすぐわかるぞ！」

次郎は危ないところで冷笑をかみこらした。

「立て！ おれについて来い！」

その生徒はまた怒鳴った。そして、肩をいからしながら教壇を降りて廊下に出た。

新入生たちは、ぞろぞろと、しかし、何となくお互いに先をゆずりたがっているようなふうで、その後についた。だれの口からも、ささやき一つもなかった。

もう一人の五年生は、みんなが教室を出るのを入口に立つてじつと見ていたが、最後の一人が出てしまうと黙ってその後についた。この生徒の制服にはボタンが五つともそろっており、顔つきもおとなしそうだ。次郎は教室を出しなにと彼の顔をのぞいたが、別に不愉快な感じも起こらなかった。

雨天体操場までは渡り廊下伝いで、かなり遠かった。次郎たちの組が着いた時には、他の組の新入生たちはもうきちんとその中央に

並ばされていた。次郎たちは三つボタンの五年生の指揮でその左側に四列縦隊に並んだが、トタン屋根をふいただけの、壁も何もない広々とした土間が、次郎には何かものすごく感じられた。

それまであちらこちらに散らばっていた五年生たちは、新入生の整列が終わったと見ると、急にその周りをぐるりと取り巻いた。それはちょうど地曳網を下ろしたといった格好であった。

それが終わると、体操の指揮台の上に一人の五年生が現れた。三つボタンとは違って、非常に品のいい、聡明そうな顔つきをしている。彼は隠し（ポケット）から小さな紙片を取り出し、割合静かな調子で演説を始めた。

演説の内容は次郎にはよくわからなかった。言葉の言い回しが変に込み入っているうえに、まだ聞いたことのない漢語が多過ぎたのである。しかし、悪いことを言っているようには、ちつとも思えなかった。

「校風は愛と秩序によって保たれる。上級生は愛をもって下級生に接するから、下級生は秩序を重んじて上級生に十分の敬意をはらってもらいたい。」

大体そんなような意味に受け取れた。そして最後に、「以上、五年生を代表して、新入生諸君に希望を述べた次第である。」と言って、その生徒は指揮台を降りた。次郎はそれで万事が終わったつもりになって、ほっとしていた。

ところが、それから後が大変だった。その次に指揮台の上に現れ

をもって待っているかのようなのであった。

そのうちに時間は三十分とたち、四十分とたつていった。次郎は次第にいらいらしてきた。そしてたまらないほどの憎悪の念が、腹の底から込み上げてくるのを覚えた。それでも歯を食いしばって我慢していたが、指揮台の狐は新入生を見渡しなが、次々にいろんな難癖の種を見付け出して、いつまでもねばっていた。そしてしまいには、とりわけ皮肉な調子でこんなことを言った。

「上級生が訓戒をしてやっているのに、君らは地べたばかりを見ている。それを無礼だとは思わんか。」

これには地曳網の連中もさすがに意外だったらしく、すぐには声援ができなかった。しかし一人が思い出したように「そうだ失敬千万だ！」と言うと、次々に「こいつら聞いちゃおらんぞ」とか「上級生をばかにするにもほどがある」とか、いろんな罵声が方々から起こってきた。

新入生たちはおそろおそろ顔を上げた。しかし、みんな眼の付けどころに困っているようなふうだった。その中で次郎一人だけが、わざとのように首を伸ばし、狐の顔をまともににらんでいた。

しばらく沈黙が続いた。狐は新入生たちの顔を一人一人丹念に見回していたが、次郎の眼に出くわすと、その視線はびたりとそこで止まった。次の瞬間には彼の頬に冷たい微笑が浮かんだ。微笑が消えたかと思うと、彼の痛走った声がトタン屋根をびりびりと震わすように響いた。

「おい、そのちび！ 貴様はよっぽど生意気だ。出て来い！」  
次郎は動かなかった。そして彼の眼は依然として狐を見つめたままだった。

「出て来いと言ったら、出て来い！」

もう一度狐が叫んだ。しかし次郎はびくともしなかった。

「上級生の命令を聞かんか！ ようし！」

狐はそう叫んで指揮台を飛び降りると、新入生の列を乱暴に押し分けて次郎に近付いた。そして、いきなり彼の襟首をつかみ、引きずるようにして彼を指揮台の前に連れて行った。すると、ほかの五年生が四、五名、ぞろぞろとその周りに寄って来た。その中には最初演説した生徒や、猛猛な山犬の顔は見えなかった。しかしその代わり、三つボタンが恐ろしい眼をして彼を見据えていた。

「名は何というんだ。」

狐がたずねた。

「本田次郎。」

次郎はぶつきらぼうに答えた。

「ふむ、生意気そうだ。」

三つボタンが端から口を出した。

「貴様はさつきおれをにらんでいたな。」

狐は今度はうす笑いしながら言った。

「見てたんです。」

「何？ 見ていた！」

「ええ、見てたんです。地べたを見るのは無礼だって言うから、顔を見てたんです。」

「理屈を言うな！」

鉄拳が同時に次郎の頬に飛んで来た。しかし、次郎の両手が狐の顔に飛びかかったのも、ほとんどそれと同時だった。

それから後、次郎は何が何やら分からなかった。ただ真つ黒なものが周囲を取り囲み、そこから手や足が何本も出て、自分の体を前後左右に跳ね飛ばしているような感じだった。

「もうよせ！ もうこのくらいでいいんだ。」

山犬の声に似たどら声が聞こえて、彼の周囲が急に明るくなった。思った時には、彼は地べたに横向きに転がっていた。彼の顔の真ん前には、ペンキのはげた指揮台が二つ三つ節穴を見せて立っていた。

彼はじつと耳をすました。

「ばかなやつだ。」

そんな声がどこから聞こえた。

彼はその声を聞くと、無意識に起き上がった。そして、くるりと向きを変えて新入生のほうを見た。彼はもうすっかり落ち着いていた。新入生たちはみんな青い、おびえきったような顔をして彼を見ていた。その青い顔の両側に、五年生たちがにやや笑って立っているのが、はっきり見えた。

次郎はその光景を見ると、これからどうしたものかと考えた。も

との位置に帰る気には、とてもなれなかった。かといっていつまでもそのまま立っているわけには、なおさらいかない。彼はしばらくじろじろと周囲を見回していたが、ふと眼の前に、踏みにじられたようになって転がっている帽子が眼についた。それは、彼がついこないだ父に買ってもらったばかりの、そして昨日初めて組主任の先生に渡された新しい徽章を付けたばかりの、彼の制帽だった。

問二 彼は思わずかっとなった。同時に鼻の奥が酸っぱくなつて、そこから熱いものが眼の底にしみてくるような気がした。しかし、彼は唇をゆがめてじつとそれを抑えた。そして、静かにその帽子を拾い、丁寧に形を直し、塵を払ってそれをかぶると、そのままさつさと渡り廊下のほうに向かって歩き出した。

「こらっ！ どこへ行くんだ！」  
五年生の一人が叫んだ。それは三つボタンらしかった。次郎はしかし、振り向きもしなかった。

「あいつ、いよいよ生意気だ！」

「このまま放つとくと、上級生の權威にかかわるぞ！」

「つかまえる！」

五年生全体がざわめき立っているのを後ろに感じながら、次郎はもう渡り廊下を一、二間ほど歩いていた。

彼は、そこでちよつと後ろを振り返って見た。すると雨天体操場の中から無数の視線がまだ自分をのぞいており、その視線の一部をさえぎって、二人の五年生が入口の近くに向きあつて立っているの

が見えた。その一人は三つボタンであり、もう一人は最初に演説した生徒だった。

次郎は、三つボタンが自分を追っかけるのを、  
問三 演説した生徒が止めているんだなと思ひながら、足を早めた。

次郎が本校舎の前まで来ると、ちようど職員会議が終わったところらしく、先生たちがぞろぞろと玄関から出て来るところだった。彼は先生たちに顔を見られるのがいやだったので、校舎の陰にかくれて人影の見えなくなるのを待つことにした。

その間に彼は、自分の着物——制服ができるまで和服に袴だった——が破れていないかを調べてみた。不思議にどこにも大した破損はなかった。ただ袴の右わきに二寸（約六センチメートル）ばかりのほころびがあるだけだった。時間割を写すために持って来ていた手帳と、父に買ってもらったガマ口（財布）とを懐に入れていたが、それらは無事だった。

肩や股の辺に二、三か所鈍痛が感じられしたが、次郎はほとんどそれを気にしなかった。彼が最も気にしたのは頬がはれぼったく感ずることだったが、手でさわってみると、さほどでもないらしいので安心した。

（これなら大丈夫、自家で気が付く人はない）

そう思つて門のほうをのぞいてみると、もう人影は見えなかった。彼は思い切つて立ち上がり、辺りに注意を払いながら門を出た。門を出ると、無念さが急に込み上げてきて、涙がひとりで頬を

流れた。だが同時に、不正に屈しなかったという誇りが、彼の胸の中で強く波打っていた。彼の涙はすぐ止まった。彼は一人で歩きながら、少しも寂しいという気がしなかった。「武士道」「慈悲」——今日講堂で見たり聞いたたりしたそんな言葉が、いつの間にか思い出されていた。そして、問四「慈悲」という言葉は、もう正木のお祖母さんを思い出させるような、そんなやさしい言葉ではないように思われてきた。

「涙のある人間だけが、すべてを支配することができるんじゃない。」

大垣校長の言ったそんな言葉が、今更のように強く彼の胸に響いてきた。

歩いて行くうちに、山犬や狐や三つボタンのいやな顔がひとりどに思い出された。しかし彼はもう、それらをちっとも恐いとは思わなかった。それどころか、彼らの前に青い顔をして並んでいた新入生たちのことを思うと、問五一種の武者ぶるいのようなものを総身に感ずるのだった。

(下村湖人『次郎物語』による)

問一 ① 入学式で講堂に入った時、次郎が強く心ひかれた言葉があります。その言葉を一つ抜き出さない。

② 入学式における校長の訓辞において、校長は次郎たちにとって何が最も大切だと言っていますか。二つ抜き出さない。

③ 特に不快に感じられた五年生に対して、次郎はその特徴をとらえたあだ名をつけています。それらを四つ抜き出さない。

④ 始業式の日、校門を出てから、次郎は自分のどのような気持ちに気がしましたか。それを表す言葉を二つ抜き出さない。

問二 「彼は思わずかつとなった。同時に鼻の奥が酸っぱくなって、そこから熱いものが眼の底にしみてくるような気がした」とありますが、この時の次郎はどのような気持ちだったのでしょうか。わかりやすく説明しなさい。

問三 「演説した生徒が止めているんだな」とありますが、なぜそのように次郎は想像したのでしょうか。演説した生徒に対する次郎の思いをふまえて、わかりやすく説明しなさい。

問四 「慈悲」という言葉は、もう正木のお祖母さんを思い出させるような、そんなやさしい言葉ではないように思われてきた」とありますが、次郎は「慈悲」をどのようなものだと思いつているのでしょうか。わかりやすく説明しなさい。

問五 「一種の武者ぶるいのようなものを総身に感ずるのだった」とありますが、この時の次郎はどのような気持ちだったのでしょうか。わかりやすく説明しなさい。

二 次の①～④の文中のカタカナを漢字に直しなさい。送りがない(ひらがな)を付けて答えなさい。字は一画ずつ丁寧に書きなさい。

- ① 学級委員をツトメル。
- ② 文章をミジカクまとめる。
- ③ 祖父のヨウショウのころの写真。
- ④ ものすごいギョウソウでにらんだ。

A  
国  
語

12

解  
答  
用  
紙

|      |
|------|
| 受験番号 |
|      |
| 氏 名  |
|      |

一

問一

①

|  |
|--|
|  |
|--|

②

|  |
|--|
|  |
|--|

③

|  |
|--|
|  |
|--|

④

|  |
|--|
|  |
|--|

問二

|  |
|--|
|  |
|--|

問三

|  |
|--|
|  |
|--|

問四

|  |
|--|
|  |
|--|

問五

|  |
|--|
|  |
|--|

二

①

|  |
|--|
|  |
|--|

②

|  |
|--|
|  |
|--|

③

|  |
|--|
|  |
|--|

④

|  |
|--|
|  |
|--|